

第二章 教師になるまで、
神父になるまで



「隠れキリシタン」の末裔

私は大正の終わりのころ、長崎市の浦上に、十一人兄弟の十人目として生まれました。家は、長崎市を見下ろす小高い丘の上にあります。

長崎は、一五五〇年（天文十九年）にフランシスコ・ザビエルが平戸を訪れて以来、全国でもひとときキリスト教が人々のあいだに広く深く行きわたっていったところでした。キリシタン大名の有馬晴信らの名から長崎を連想する方もいるでしょう。大浦天主堂をはじめ、戦前に建てられて現在も残っている教会の約半分が長崎に集まっていることから、この地におけるキリスト教の歴史をうかがうことができると思います。

私の先祖も、江戸時代には熱心なキリシタンの一家でした。

ご存じのとおり、江戸時代、徳川幕府はキリスト教を信じることを禁止していました。江戸時代の早い時期から密告を奨励し、「踏み絵」を実施するなど、江戸幕府にとってキリスト教は大きな脅威でさえあったようです。中でも長崎は国内でも熱心な信者の多い地域でしたから、監視の目も特に厳しく、奉行所はひそかに信仰を続ける「隠れキリシタン」たちを積極的に検挙し、投獄していきました。「踏み絵」は長崎で最初に実施されたとする文献もあるようです。

キリシタンの大々的な摘発は「くずれ」と呼ばれ、全国でしばしば何百人から何千人というキリシタンが捕らえられ、処刑されました。浦上は、一七九〇年（寛政二年）に二百人近くが捕らえられた「浦上一番くずれ」以降、一八六七年（慶応三年）の「浦上四番くずれ」まで、四度にわたる大検挙に見舞われています。

私の祖先たちは、キリシタンたちがかたまって住んでいるのは危険であるということで、分散を命じられ、鹿児島に流れていきました。

やがて幕末になると、鎖国を解いて国交を結んだ各国から江戸幕府のキリスト教迫害政策を批判する声が高まります。こうした諸外国の圧力により、一八五六年（安政三年）に幕府は長崎と下田で「踏み絵」を廃止していました。しかし、徳川幕府がおかれ、明治政府となってからも、キリシタンへの弾圧政策がすぐに全面的に解かれたわけではありませんでした。

ところが、開国間もない日本政府は、自国に不利な条件の条約を結ばされ、その後、改正に苦勞したことからもわかるように、欧米諸国に対して強い立場にあったわけではありませんでした。

維新から間もない日本政府は市中に高札を掲げ、その中で「よこしまな宗教であるキリスト教を信じることを禁止する。」とうたいました。すると各国の公使らはこれに強く抗議し、日本政府は

